

【その苦悩に

おいてこそ・・・】

「一生懸命生きれば生きるほど、人間は必ず苦悩に直面します。特に純粋な人ほど、ちよつとしたことでも悩みます。人間は苦悩が深ければ深いほど、人に優しくなれます・・・。」

冒頭から小難しい事を掲げてしまいました。この苦悩という感情は人間にとつて必要不可欠なのです、という事を今月号では説明していきたいと思えます。

私は、この苦悩をどうとらえるかという観点から、次の様に思うのです。私は苦悩を体験した人にはしか分らないことが、世の中にはたくさんあると考えています。その苦しい事から避けて生きようとする人間の姿勢からは、人生の本質は見えてこない。

自分で悩んで、自分で手に入れた答えでない限り、所詮身に付きません。歴史上の人物からも分かるように、道を極めた人というのは、必ず苦悩に直面しています。しかもそれが、真剣に生きれば生きるほど、大

きく深い苦悩に出合っています。どんな人でも苦悩に出合うのです。

ここで一つ断っておきますが、私は苦悩を奨励しているわけでは決してありません(笑)。勿論、私も悩んでいるときより楽しい時の方が好きです。楽しいときより、苦悩が好きだという人は、一種の病気と言うほかありません・・・(笑)。

精神分析医のフロイトは「人間は快を求めて生きるもの」と人間を定義しています。まさに「快」を求める気持ちの人が人間の感情でしょうね。心が喜ぶこと、肉体が喜ぶこと、その中に人間本来の幸せがあるのだと思います。

しかし、この快を求めて生きるという考え方から一歩踏み込んで、「意味への意志」を持つのが人間だと定義した人がいました。アウシュビッツ強制収容所の体験を描いた『夜と霧』の著者で有名なビクトル・フランクです。彼は平成9年、92歳の生涯を終えました。ここでは紙幅の関係上、彼についての詳細は省かせて頂きます。彼の言葉は、私達に色々な問いかけをしています。どんな苦難からも逃げることのなかった彼ならではの言葉なのでしょうね？中でも・・・。

「生きるとは何か？苦悩を乗り越えた先には何があるのか？」我々に問いかけています。

皆さんなら、どの様にお考えになりますか？

まず苦悩というのは、人間を理解する上で絶対、不可欠なことなのです。悲觀的になったり、くよくよする事があつたら、「その体験がなければつかめないことがある！」と、あえて苦悩を受け入れてやりましょう。その先には、苦悩を受け入れて、乗り越えた経験を持つ人でないと分からない世界がひろがっています。

極端な言い方をすれば、「その苦悩がなければ、他人への共感あまり生まれない！」と言えるのではないのでしょうか？

「あなたにとつて、人生とはどういうものですか？」と聞かれたら、あなたなら何と答えるでしょう？答えは様々でしょうが、ただ一つ言えることは、人生は無限ではなく有限であるということ。また、その持ち時間も人によつて違います。限られた人生を有意義に、しかも濃密に生きるには金や物に執着してはだめです。心の底からの満足感ゆいごつは「唯物」では得られません

ん。人はそれぞれに可能性を持つて生まれてきます。その可能性を開花させるのは、唯物物の目標ではなく、

「唯心ゆいしん」に立脚した人生目標でなくてはいけないのです。人生目標というのは、煎じ詰めれば、「自分はどういう使命を帯びてこの世に生を受けたのか？」という事に気がつく事だと思えます。まさか生きることの大目標が金儲けということではないはずですよ？

人それぞれに与えられた使命も目標も違います。だが目標のある人と無い人とは、人生の深さが違ってくる。目標(夢)のある人は障害を乗り越え、可能性を開花させるエネルギーを、自然と神仏から与えられるのです。苦悩を乗り越える度に自分を磨いて、慈しみの心を持ち、より深く他人と共感できる自分になれるように、益々の努力・精進を祈念します。

副住職 谷川 寛敬